

■はつめいってなあに

この動画は、発明とは何か、特許とは何かをやさしく説明する動画です。

<第一章のねらい>

- ・世の中の不便さを解決するアイデアが発明であることを理解させる。
- ・世の中に存在する物を改良したのも発明であることを理解させる。

<第一章あらすじ>

レオ太のお父さんはパン屋さんを経営しており、お母さんはパン屋さんの隣でレストランを経営しています。レストランでは、お客さんに出すパンが足りなくなると、お父さんにパンを注文し、パン工場からパンを持ってきてもらっています。

レオ太は、友人のゴリオとともに、簡単な方法でお父さんにパンを注文する方法を試行錯誤し、レストランとパン工場との間をつなぐホースの電話機を発明しました。さらにレオ太は、お父さんが出かけるときでも使えるような軽い電話機ができないか試行錯誤し、携帯糸電話機を発明しました。

<第二章のねらい>

- ・発明した場合には、特許出願をすることで特許をとれることを理解させる。
- ・特許を取ることを助ける職業として、弁理士が存在することを理解させる。
- ・特許をとった物については、他人は真似することができないことを理解させる。
- ・仮にレオ太が特許をとらなかったら、発明の労力が無駄になってしまうことを理解させる。
- ・レオ太は特許を取ったからこそ、次の発明をする意欲が沸いたことを理解させる。
- ・特許制度のお陰で、競業者同士の間には秩序ある協力関係を構築することが可能となることを理解させる。

<第二章あらすじ>

レオ太は、いろいろな距離の間で携帯糸電話機が使えるように、コップの外に糸巻きを設け、糸の長さを自由に変えることのできる糸電話機を発明しました。

レオ太は、糸の長さを自由に変えることのできる糸電話機について、弁理士のキヨじいさんの助けを借りて特許出願をし、特許を取りました。そして、糸の長さを自由に変えることのできる糸電話機を大量に作り、フリーマーケットで売り出しました。レオ太の作った糸電話機は飛ぶように売れました。

ある日、レオ太が糸電話機をフリーマーケットで売っていると、レオ太の糸電話機とそっくりな糸電話機をミャーコが売っていました。ミャーコの糸電話機は、レオ太の糸電話機を真似して作られたものでした。ミャーコの糸電話機はレオ太の糸電話機よりも安いので、レオ太の糸電話機は全然売れなくなりました。

レオ太はキヨじいさんに相談に行きました。キヨじいさんは、レオ太の糸電話機は特許をとっているものだから、真似してはいけないのだということをミャーコに教えました。レオ太は、ミャーコを仲間にして、一緒に糸電話機を売ることにしました。レオ太は、糸電話機をたくさん売ったお金で次の発明に取り組むことにしました。